

幼小連携を視野に入れた国語教育について

— 絵本を題材として —

小川 恭子¹ 駒形 武志²

Kindergarten and Elementary School Partnerships for Japanese Language Education

— Based on Picture Books —

Kyoko OGAWA¹, Takeshi KOMAGATA²

Abstract

Elementary schools develop the Start Program to enable first graders to smoothly adapt to elementary school life. The program covers points children should take into consideration in terms of their daily lives along with learning aspects. However, this program was initially developed without paying adequate attention to what children had already learned and experienced at kindergartens or nursery schools, thereby making it difficult for children to follow and occasionally leading to decreased motivation for learning.

This thesis highlights the purpose and usage of picture books and how they vary between kindergartens, nursery schools and elementary schools (especially for students in lower grades), as well as points teachers should consider when introducing picture books. It also suggests that by effectively using picture books with a full understanding of their characteristics and how they should be introduced, on-site teachers can have a further positive effect on children's growth, and that picture books are extremely instrumental as a material for the Start Program.

はじめに

平成 27 年 3 月、文部科学大臣より幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領の一部が改正され平成 30 年 4 月 1 日より施行されることが通達された。学習指導要領は、学校を取り巻く環境や児童・生徒達の変化（不登校・いじめ・学力低下等）によって変化してきているが、今回の改正はいじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善すべく、「教育基本法改正等明確になった教育の理念を踏まえ、『生きる力』を育成」「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視、授業時数を増加」「道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成道徳科に検定教科書を導入」の 3 点を基本的考えとして打ち出している。中でも教育内容の主な改善点とし

所属：

¹ 藤女子大学人間生活学部保育学科

² 札幌市立鴻城小学校校長

¹ Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University

² principal of Sapporo Municipal Kojo Elementary School

て、「伝統や文化に関する教育の充実」の一つに「ことわざ、古文・漢文の音読など古典に関する学習を充実（国語）」が挙げられていること、また「重要項目」の一つに「幼小連携を推進、幼稚園と家庭の連続性を配慮、預かり保育や子育て支援を推進（幼稚園）」といった点が指摘されている。

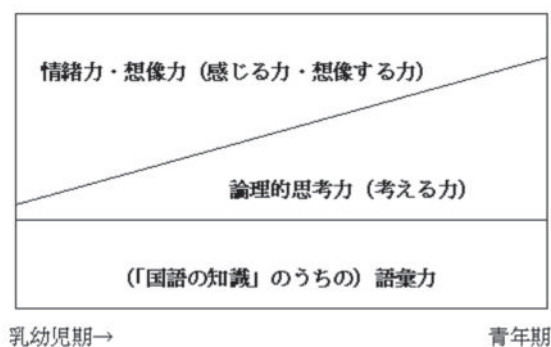
幼小連携の推進は以前よりその必要性は示されているが、本稿では国語教育における幼小連携のあり方を「絵本」を題材に考察を行うことを目的としている。子どもにとって絵本はそれ自体が楽しみであり、想像力を働かせながら思い描く未知の世界を与えてくれ、豊かな情操を育む「宝箱」である。しかし、そういった体験は与える大人の価値観や準備される環境に大きく左右される。どのような本が提供されるのか、どの程度の時間が読書に費やされるのか、どのような声を通して本の内容が伝えられるのか。それにより子どもの内的世界の構築が影響を受けるとするならば、その教育効果大きい。今回の改正にある「発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善する」ために幼小連携を視座に国語教育において絵本の活用が有効であることを明らかにしたいと考える。

I 「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」が示す国語教育

1、国語教育について

まず、国語教育について述べる。文部科学省ではこれからの時代に求められる国語力についてのなかで「国語は社会全体の課題」として、「国語教育に関し、特に重要な役割を担うのは学校教育であるが、その中でも小学校段階における国語教育は極めて重要である。しかし、言葉にかかわる国語教育の問題は学校教育だけに限定できるものではない。家庭や地域社会における言語環境が、子供たちの国語力に大きな影響を及ぼしていることに配慮し、学校教育、家庭教育、社会教育などを通じて、国語教育を社会全体の課題としてとらえていく必要がある。」と指摘している。つまり、「言葉にかかわる国語教育」との表現にある通り、国語教育は言葉との関連のなかで展開されていることが理解できる。

さらに「発達段階に応じた国語教育の具体的な展開」として、脳科学の知見から子どもの発達を「3歳までの乳幼児期」「3歳～11・12歳（小学校高学年くらい）まで」「13歳（中学生）以上」と3段階に分け、発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」を次のイメージ図で示している。



中でも3歳までの乳幼児期はコミュニケーション重視期として位置付けており、家庭での親子のコミュニケーションを通じて語句・語彙力を身に付けたり、子供の感性・情緒を育てながら言葉を発達させていくことが重要であること、次の3歳～11・12歳（小学校高学年くらい）までは基礎作り期であり、幼児期では、「読み聞かせ」や読書により言葉の数を増やし、さらに「言葉と社会や事物との関係」を習得するために、家庭や地域で多くの様々な経験を積ませることを意識すべきであると指摘する。

3歳から11・12歳とは、まさに幼稚園・小学校に在園・在校する子どもたちである。したがって、「国語教育」という視点で考えるならばこの時期は基礎作り期であり、特に幼稚園では「読み聞かせ」や読書による言葉数の増加や「言葉と社会や事物との関係」の習得のための素材として「絵本」は非常に重

要であるといえる。

2、幼稚園教育要領と国語教育

次に幼稚園教育要領より国語教育を考える。幼稚園教育要領の第2章「ねらい及び内容」では幼稚園教育の意図を、心身の健康に関する領域「健康」、人とのかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」の5つの領域で示しており、この中で「言葉の獲得に関する領域：言葉」が「国語教育」に近い領域として位置づけられる。

しかし、幼児の発達は様々な経験を通して獲得するものであり、生活を総合的にとらえて指導されなければならない。その意味から、幼稚園教育における領域は、「それぞれが独立した授業として展開される小学校の教科とは異なるので、領域別に教育課程を編成したり、特定の活動と結び付けて指導したりするなどの取扱いをしないようにしなければならない。」とされ、各領域の「内容の取扱い」を踏まえての適切な指導が求められているが、その「内容の取扱い」に「絵本」に関して次の指摘がある。

- 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- 幼児は、絵本や物語などの中に登場する人物や生き物、生活や自然などを自分の体験と照らし合わせて再認識したり、自分の知らない世界を想像したりして、イメージを一層豊かに広げていく。そのため絵本や物語などを読み聞かせるときには、そのような楽しさを十分に味わうことができるよう、題材や幼児の理解力などに配慮して選択し、幼児の多様な興味や関心に応じることが必要である。
- 幼児は、絵本や物語などの読み聞かせを通して、幼児と教師との心の交流が図られ、読んでもらった絵本や物語に特別な親しみを感じるようになっていく。そして皆で一緒に見たり、聞いたりする機会では、一緒に見ている幼児同士も共感し合い、皆で見る楽しさを味わっていることが多い。

つまり、幼稚園教育要領より国語教育を考えた場合、先の重点の置き方にある「語彙力：言葉に関する感覚を養う」「感じる力・想像する力：イメージを豊かに広げる」を、「絵本・童話」を素材としながら、教師（保育者）との情緒的つながりを絆に培うことが求められているといえよう。

3、小学校学習指導要領と国語教育

小学校学習指導要領に示されている国語の教科の目標は、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」とある。また、「C読むこと」領域の指導事項には、①から⑥までの6点が示されているが、そのうち、絵本との関わりが強いと考えられる部分は、①音読に関する指導事項（語のまともりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること）、④文学的な文章の解釈に関する指導事項（場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと）、⑥目的に応じた読書に関する指導事項（楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと）である。このように小学校の国語教育における絵本の活用を考えていく時、小学校学習指導要領に示されている「教科の目標及び内容について」と、3領域の中の「読むこと」の指導事項を押さえておく必要がある。

さらに、幼稚園や保育園の指導との繋がりで、第1学年の入学当初の学習を「スタートカリキュラム」と位置付け、生活科との関連を図りながら入学前の経験を生かして楽しく国語の学習に出会い、学習の基本を身に付けていけるように工夫していくこととしている。

小学校学習指導要領より国語教育を捉えた場合、絵本を題材とした国語教育の実践や保幼少連携に向けての国語教育の必要性が理解できる。

II 絵本と国語教育の関連性

1、そもそも「絵本」とは何か

絵本の定義は、と聞かれると意外と難しい。絵本作家の長新太氏は、「子どもの本には『童話』と『絵童話』と『絵本』の3種類がある」といい、「『童話』とは比較的長いお話にさし絵が入っているもの。『絵童話』とは紙面において絵の占める割合は多いが、文章も長く絵が文章の説明をしてしまっているようなもの。」「本当の絵本とは、24ページから36ページ位までのもの。絵と文章が見開きごとにまとまっているもの。何より、『絵で表現していることは文章で書かない』『文章で書いていることは絵で描かない』『無駄を省いた絵と文がお互いを支えあい高めあって表現されたもの』を指す。」と述べている。

また、児玉孝乃は「絵本とは何か——民話・昔話絵本を利用につなげよう——」のなかで、「児童文学家の松居直氏は、絵本について、『絵本は子どもに読ませる本ではない。大人が子どもに読んでやる本である。耳で音を聞いて、目で挿絵を読んで(中略)読んでもらう時に不思議な働き、大きな世界をつくっていく。自分で読んでいては絵本は分からない。』さらに、『絵本というのはバリアフリー、子どもから大人まで、言葉と絵で非常に幅がある自在な世界』と大人にこそ読んでほしいと力説している。」と紹介している。

このように、識者の視点によって表現は様々でありなかなか難しいが、本稿では絵本の定義として長新太氏が述べているように、「無駄を省いた絵と文がお互いを支えあい高めあって表現されたもの」と考えることにする。

次に「絵本」における絵と文の関係について考えてみたい。

絵本には絵が必ず存在する。文字の無い絵本はあっても、絵のない文字だけの絵本は存在しない。文字だけでストーリーを追っていくものは、絵本とは違ったジャンルになる。実際に文字の無い絵本が出版されている。例えば、イエラ・マリの『木のうた』や『まるい まあるい』などがそれである。イエラ・マリはイタリア出身の作家である。グラフィック・アートの面から優れた絵本を発表している作家で、その芸術性の高さ、絶妙な色彩感覚や画面構成を持つ一方、科学性をも失わない絵本として、高い評価を受けている。絵だけの絵本に接した読者は、ページを捲り、絵を追っていくことによって、お話のストーリーを想像することになる。そして、絵から様々なイメージを膨らませる。文字による説明がない分、読者は自分自身のこれまでの経験や体験、あるいは思考の傾向によって想像の仕方が違ってくる。私の子どもたちが小さかった頃、『木のうた』の絵本をプレゼントしたことがある。兄と妹は、それを飽きずに何度も見ていた。絵本は一本の大きな木を中心に、リスと小鳥たちとの生活を交えながら四季の移り変わりを丁寧に描いている。するとそのうちに、兄の方が絵の説明を始めるようになった。母親や私、時には妹を相手に話をしてくれた。話の内容はその時々によって違っていたが、その時の彼の想像(思いつき)によって思わぬ方向に進んでいくこともあった。このように、文字の無い絵本は、読者の想像力を育む効果があるようだ。おそらく作者もそのようなことを考えながら絵本を創作しているのだと思う。したがって、物語の説明のための「挿絵」とは違った意味合いが、絵本の「絵」にはある。ここで、1930年前後の欧米における絵本の質的な変化を表した資料の一部を抜粋する。

「それまでのストーリーに絵をつける挿絵絵本から、“絵が物語る絵本”への転換…。」現在「絵本」と言われている本の原型がこの「絵が物語る絵本」であると考えられるが、この転換により、絵が物語るという点において、絵本は文学と質的に異なることになり、絵本独自の道を歩み出したと考えられる。このため、絵本の要素として「①絵を主体とし、絵だけまたは絵と文が融合・調和されて構成された出版物。」「②絵を見ていくだけでストーリーがわかる。」は、絵本を定義していく上で重要であることがわかる。児童を対象として創作された文学作品を表す「児童文学」という分野が存在する。絵本は児童文学の分野から出発したといっても間違いはないだろう。絵本の誕生と児童文学との関係には極めて深いものがある。文学が言語表現を重視した芸術作品であるのに対して、絵本は絵の要素、つまり言語以外の表現も重視する芸術作品ということができる。そのため「絵本」と「児童文学」とは異なる分野とも考えられる。

日本には、鳥獣戯画から奈良絵本そして漫画やアニメにいたるまで、優れた「絵を読む文化」がある。日本は世界最古の絵本の国であり、世界一の絵本先進国だとも言える。したがって、絵本は子どもにとっても、大人にとっても、物語を楽しむ大事な文化財であると考えられる。

2、絵本と幼稚園教育との関連性

子どもに様々な影響を及ぼす絵本の役割について、子どもの発達の道筋に沿いながら実践的に明らかにしていく必要がある。坂本美頰子は『保育のなかの絵本』で子どもの発達と年齢にふさわしい絵本について以下のようにまとめている。(抜粋)

【0歳児】・色や線がはっきりとした絵本。

- ・鳴き声の擬声語、擬態語が書かれている絵本。
- ・始まりから終わりまで読むのではなく、時には子どものお気に入りのところやちょうど開いたところだけを見ても良い。
 - *まついのりこ作『じゃあじゃあ びりびり』
 - *松谷みよこ作『あかちゃんの本』シリーズなど。

【1歳児】・現実の世界で自分の心を立て直すことができるような絵本。

- *瀬名恵子作『いやだ いやだ』『あーんあんの絵本』
- *なかのひろたか作『ぞうくんのさんぽ』など。

【2歳児】・子どもの遊びのヒントやきっかけになりそうな絵本。

- ・自分でやりたい気持ちを応援する絵本。
 - *とくながまり・みやざわはるこ作『じぶんでじぶんで』
 - *ディック・ブルーナ作『うさこちゃんのにゅういん』など。

【3歳児】・子ども自身の経験と関わりのある絵本を読むことで、自分もその登場人物になることができる。

- *ジーン・ジオン作『どろんこハリー』など。

【4歳児】・色々な面で一步踏み出すことができる支えとなるような絵本。

- *マレーク・ペロニカ作『ラチとライオン』
- *渡辺茂男作『しょうぼうじどうしゃじぶた』
- *松野正子作『かくれんぼうさぎ』など。

【5歳児】・幼児期前半までの言葉やひびきやリズムや個々の場面を楽しむような楽しみ方から、お話そのものの文脈やストーリー全体を理解するようになる。

- ・絵本の登場人物の関係やそれぞれの気持ちも、よくつかむことができる。
- ・違う世界や文化への興味も絵本を通じて広がる。
- ・ナンセンス絵本やユーモアたっぷりの絵本を味わう。
 - *マンロー・リーフ作『はなのすきなうし』など。

幼稚園は概ね3歳か5歳の子どもを対象としているが、2015年度に本学科学生(4年生)が4歳児を対象に行ったアンケート調査からも発達段階に応じた絵本の有効性をうかがうことができた。先行研究より4歳児ですでに人の気持ちを自分のことのように感じたり、想像したりすることができるということ明らかにし、さらに発達段階として「抽象的な世界」という目に見えないものを想像することや理

解することができるという点に注目をして「絵本が子どもの共感性に与える影響について」をテーマにアンケートを行ったものである。回収数が少なく（17件）あくまでも傾向を知る内容ではあったが、共感性をより効果的に子どもたちに育むためには、「絵本を読む回数」「読む際の工夫」「選ぶ絵本」が大きな影響を与えているということが確認できた。

絵本とは保育の生活場面の切り替えに使うだけではなく、感動したり驚いたり未知の世界を教えてくれるものである。絵本を通して様々な感情に触れることで子どもは徐々に他人の痛みや思いを知ることができるようになり、子どもの豊かな心の成長につながる事が考えられる。このように絵本は幼稚園教育において、個の発達・集団性の発達・保育の設定等に大きな意味を持つ。

3、絵本と小学校国語教育との関連

小学校国語の教科書をみていくと、教科書そのものが1冊の絵本であるかのような錯覚に陥ることがある。子どもたちの想像力を掻き立てるような表紙の絵、発達段階を配慮した作品群、しっかりとした装丁など、初めて教科書を手取る子どもたちは、どの子も目を輝かせながら、大切に教科書をランドセルにしまい込む。

国語の教科書（光村出版）の中で使われている教材を分類してみる時、文章の形態で「①文学的な文章（物語文）②説明的な文章（説明文・論説文）③詩・短歌・俳句④その他（漢字・ローマ字表など）」に分けてみる方法がある。

絵本は文学的な文章に分類することができると考えられるが、学年毎に配置されている文学的な文章の教材は以下ようになる。

【1年】上巻 「はなのみち」「おむすびころりん」「おおきなかぶ」「ゆうやけ」

（森山 京 作 高見八重子 絵）

下巻 「くじらぐも」（中川李枝子 作 柿本幸造 絵）

「まのいりょうし」（稲田和子 作 筒井悦子 絵）

「ずうっと、ずうっと、大すきだよ」（ハンス＝ウィルヘルム 作・絵 久山太市 訳）

「たぬきの糸車」（岸なみ 作・村上 豊 絵）

「だってだつてのおばあさん」（佐野洋子 作・絵）

【2年】上巻 「ふきのとう」（工藤直子 作・平岡 瞳 絵）

「スイミー」（レオ＝レオニ 作・絵 谷川俊太郎 訳）

「ミリーのすてきなぼうし」（きたむらさとし 作・絵）

下巻 「お手紙」（アーノルド＝ローベル 作・絵 三木 卓 訳）

「わたしはおねえさん」（石井睦美 作 黒井 健 絵）

「三まいのおふだ」（瀬田貞二 文 齊藤隆夫 絵）

「スーホの白い馬」（大塚勇三 作 リー＝リーシアン 絵）

【3年】上巻 「きつつきの商売」（林原玉枝 作 村上康成 絵）

「たのきゅう」（武田 明 文 やぎたみこ 絵）

「もうすぐ雨に」（朽木 祥 作 高橋和枝 絵）

下巻 「ちいちゃんのかげおくり」（あまんきみこ 作 上野紀子 絵）

「三年とうげ」（李錦玉 作 朴民宣 絵）

「モチモチの木」（齊藤隆介 作 滝平二郎 絵）

【4年】上巻 「白いぼうし」（あまんきみこ 作 ころも美保子 絵）

「ふるやのもり」（瀬田貞二 文 長谷川義史 絵）

「一つの花」（今西祐行 作 松永禎郎 絵）

「かげ」（ニコライ＝スラトコフ 作 松谷さやか 訳 伊勢隆則 絵）

下巻 「ごんぎつね」（新美南吉 作 かすや昌宏 絵）

「プラタナスの木」（椎名 誠 作 中島梨絵 絵）

- 「初雪のふる日」(安房直子 作 寺門孝之 絵)
- 【5年】 「あめ玉」(新美南吉 作 根本 孝 絵)
 「なまえつけてよ」(蜂飼 耳 作 北沢優子 絵)
 「大造じいさんとガン」(椋 鳩十 作 水上みのり 絵)
 「見るなのざしき」(桜井信夫 文 石橋富士子 絵)
 「わらぐつの中の神様」(杉みき子 作 黒井 健 絵)
 「のどがかわいた」(ウーリー=オルレブ 作 母袋夏生 訳 下田昌克 絵)
- 【6年】 「カレーライス」(重松 清 作 唐人原教久 絵)
 「河鹿の屏風」(岸なみ 文 佐藤昌美 絵)
 「やまなし」(宮沢賢治 作 かすや昌宏 絵)
 「海の命」(立松和平 作 伊勢英子 絵)

これらの教材がすべて絵本であるかという点、必ずしもそうとは言えないだろう。1年生の上巻で扱われる「はなのみち」は、2ページ毎の見開きに文章が載せられている。まさに絵本の様式を備えている教材である。

くまさんが、
 ふくろを みつけました。
 「おや、なにかな。
 いっぱい
 はいって いる。」

この一文を読んだ後、子どもたちは左側の全ページを使って大きく描かれている絵に目をやる。その絵は熊の子が袋を持ち、自分の右手のひらの上に乗っているものを見ている絵である。熊の子の手のひらからは、何かがこぼれ落ちて床の上に広がっている。たんすやストーブなど、部屋の中の様子も丁寧に描かれている。熊の子が持っている袋は、どこから見つけて来たものかも想像することができる。その後の3枚の絵も見開きの半分以上を使って描かれている。文字による読み取り以上に、絵から想像しながらお話の流れや状況をつかむことにすることができる。この活動は国語の学習の中で必ずと言ってよいほど行われる、登場人物の心情や状況を豊かに想像しながら読むことに繋がっている。

しかし、その後に出てくる「おむすびころりん」では、お話のまとまりごと(文のまとまりごと)に絵が添えられ、絵の占める割合は「はなのみち」に比べるとかなり少なくなっている。おそらく、子どもたちは学習の中では、文章を読みながら絵を見、絵を見ながら文章を読むことを行っていることが想像できる。したがって、ここで使われている絵は、どの絵も文章としっかり対応しているものであり、子どもたちの読み取りを補助するに足るものである。これはこの教材を使っての学習が、文字を読むという言語活動を通して物語の筋をつかんだり、想像を広げたりして行く始まりだからである。そこには文字を通して理解したり、想像を広げたりすることへのステップアップをねらう意図がある。

1年生の下巻の教科書に入ると文章と絵との関係は、文章が「主」であり、絵は文章を助ける「補助」の役割が強くなっていく。2年生の上巻で扱われる「スイミー」の教材では、原作の絵本の絵が全て使われているわけではない。これは、教科書を編集する際に、読み取りを重視するねらいのため、意図的に絵を省いたからである。また、大きな魚が登場する場面では、魚の向きが原作とは逆向き(反転した絵)になっていたこともあった。学年が進むにつれ、原作の絵本の絵は、補助的な役割が強くなっていくわけであるが、文章だけでは読み取れない部分を絵が補っている。

III まとめ

札幌市には、寄託図書制度というものがある。これは、市立図書館や開放図書館などをネットワーク

で結び、依頼された図書の貸し出しを行うというものである。

2年生の下巻で扱われる「お手紙」(アーノルド＝ローベル作・絵 三木 卓訳)という教材の学習を行う場合の実践を紹介したい。この物語は、がまくんとかえるくんの友情をテーマにした心温まるお話である。ある日、元気がないがまくんに対して、かえるくんは手紙を書くことになる。ところが、かたつむりくんに頼んだお手紙はなかなか届かない。かえるくんは、とうとう自分が書いた手紙の内容を打ち明けてしまうことになる。がまくんはそんなかえるくんのやさしい気持ちに感動し、二人は幸せな気持ちでかたつむりくんが届けてくれるお手紙を待ち続ける。

「お手紙」という教科書で扱われている作品は、「ふたりはともだち」の中にある五つの作品の一篇である。関連する作品には「ふたりはいっしょ」「ふたりはいつも」「ふたりはきょうも」などがある。これらを並行読書として扱うのである。朝読書の時間や空き時間を利用して子どもたちに自由に読ませる。教科書の「お手紙」の読み取りだけでは、分からなかった二人の関わりや、状況が詳しく分かってくる。そうすることによって、それまで気づかなかったことに気付き、自分自身の読み取りに深まりや広がりが出てくるのである。

K小学校の開放図書館は通称を「ほんだあらんど」という。二人の図書館司書が中心となってボランティアの方と共に様々な活動を行っている。活動には、貸出活動、研修活動、広報活動、美装活動、整本活動、ダンボの会(読み聞かせ)などがあり、年間を通して子どもたちの本との関わりを豊かにしている。

国語の学習との関わりを考え、時期になると、レオ＝レオニ、宮沢賢治、今西祐行などのコーナーが設けられる。子どもたちにはそれぞれの作者の本との出会いができるような工夫をしている。また、朝ダンボ、お話の会、ローソクの会など、定期的な読み聞かせの会も行っている。読み聞かせで取り上げられる本は、絵本が中心であるが、低学年の子どもたちにとっては、本との貴重な出会いの場となっている。さらにボランティアの方の読み聞かせのスキルが高いこともあり、高学年の朝ダンボの様子を観察していると、どの子も読書の楽しさに浸っている様子がよくわかる。スキルの高さは、例えば、文と文との間に微妙な「間」を意図的に差し込むことや、注釈が必要な場面では、さりげなくボランティア自身に戻って説明を加えたりすることである。そうすることによって、聞き手はお話のイメージを確実に持つことができたり、想像を広げたりしやすくなる。

寄託図書の制度や開放図書館の活動は、それだけでも素晴らしいものであるが、国語の学習、あるいは他教科との関わりを強くしていくことによって、一層、その役割は重要になってくる。

小学校では1年生の児童が小学校生活にスムーズに適應していくために「スタートプログラム」を組む。スタートプログラムは、生活面だけでなく、学習面で配慮すべきことにも及んでいる。プログラムが作られるようになった当初は、1年生になる児童がそれまでに幼稚園や保育園で学んできたことや体験してきたことを、あまり配慮せずに作られる傾向があった。したがって、児童にとっては「そんなこと知ってるよ」とか「そんなこと幼稚園でやったよ」という気持ちにさせてしまうことがよくあり、学習への意欲を損なうことに繋がることもあった。(小学校の場合、幼児の育ちを低く見る傾向があった。例えば、給食の配膳の仕方や音楽の技能等について)

本稿では絵本の活用について、幼稚園と小学校(主に低学年児童)のねらいや扱われ方の違い、あるいは活用にあたって配慮すべきことについて言及してきた。絵本の特性や扱い方についてよく理解し、効果的な活用の仕方を実践していくことによって、絵本の持つ可能性は子どもたちの育ちに、今まで以上にいい影響を与えるのではないかと考える。また、絵本を有効に活用することで小学校生活へのスムーズな適應をより可能にすることも本稿から指摘できるであろう。こういった「絵本」を題材とした子どもへのかかわりは、IT社会といわれる現代において今後より求められることが予想される。それは書物が与えてくれるゆったりとした「時間」や「空間」の心地よさの再確認ともいえる。

文献

- 1) 文部科学省（平成 27 年 3 月）：小学校学習指導要領
- 2) 文部科学省：幼稚園教育要領
- 3) 文部科学省：幼稚園教育要領，小・中学校学習指導要領改訂のポイント
- 4) 文部科学省：これからの時代に求められる国語力について
- 5) 正置友子（2015 年）：『保育のなかの絵本』かもがわ出版
- 6) 児玉孝乃（(2011 年）：「絵本とは何か — 民話・昔話絵本を利用につなげよう —」（『東海学院大学短期大学部紀要 第 37 号』）
- 7) 松浦 昇，中村麻有子（2007 年）：「エリック・カールの研究」（『金沢大学教育学部紀要』人文・社会科学編 56：27-54）
- 8) 森久保仙太郎（1988 年）：『絵本の世界 — 作品案内と入門講座』偕成社
- 9) 小学校国語 1 年～6 年（2015 年）：光村出版
- 10) 岩野史佳（2015 年）：「絵本が子どもの共感性に与える影響について — 4 歳児に焦点を当てて —」（藤女子大学 卒業研究論文）